

「フェミニスト出版社現象」を振り返る ——ヴィラゴ・プレスを中心に (2)

英 美由紀

イギリスの「フェミニスト出版社現象」を代表する存在であるヴィラゴ・プレスの創業の経緯と、同社の「モダン・クラシックス・シリーズ」に焦点を当てた前稿では、それらを第二波フェミニズムおよび初期フェミニズム批評の文脈に置きながら、文学カノンの再形成やその後の文学研究に果たした貢献を再確認した。同シリーズの意義は多くが認めるところであり、作家ヒラリー・マンテル (Hilary Mantel) も1980年代を回想し、「[シリーズの目印となっている] 緑の背表紙はいたるところにあった。・・・あたかも巧みな均衡の再調整がなされたかのように、世界が大いに良い方向に変わったと思ったことを覚えている」(Cooke) と語ったという。

一方、1990年代初頭の、作家ジョアンナ・ブリスコー (Joanna Briscoe) の発言は、それとは異なる様相が兆していたことを示唆している——「私たちの本棚はどれほど緑に染められていたか・・・かつてあの濃緑色・・・の表紙は、時代の最先端をいくためのパスポートだった。今ではお気に入りのフェミニスト作家をペンギン・ブックスの棚に見つけることもできるだろう」(Murray 1)。彼女はそれを、「フェミニスト出版が成功を収めた」証と捉えているが、事態はそれほど楽観的なものではなかった。むしろ、「フェミニスト出版社そのものがフェミニズム『市場』の存在を証明することになり、商業的に成立可能な書籍の幅を広げ、出版業界全体に影響を与えた」(Tuttle 263)、端的に言えば、フェミニズムが主流に組み込まれ、女性出版社の重要性が減ったというのも一面における真実だったからである。実際、シモーヌ・マレー (Simone Murray) は、「[ブリスコーの発言]以降の10年間に起こった出来事は、主流文化によるフェミニスト出版の取

り込みというトレンドの典型を示している」(3)と述べている。

こうした出版業界におけるフェミニズムの「主流化」の反面、1980年代から90年代にかけての社会風潮においては、フェミニズムの退潮も顕著だった。「バックラッシュ (backlash)」や「ポストフェミニズム (postfeminism)」と呼ばれる現象である。このような状況にあって、ヴィラゴ・プレスは同時期、大手出版グループへの編入と独立を繰り返すことになり、同社の「フェミニスト出版社」としてのあり方をめぐっては批判も巻き起こった。思想的にも、政治的にも相入れないはずの大手出版社の資本主義的、父権的側面が問題視されたのである。

本稿ではまず、1980年代後半以降のヴィラゴ・プレスの動向、またその背景を成す社会経済状況やフェミニズムの変容を概観する。次に同社の経営形態と政治的主張をめぐる議論を再検討するにあたり、「独立性」という想定そのものや、フェミニスト出版社としての独自のあり方に目を向ける。そこでは主に、著作の一章をヴィラゴ・プレスとそのフェミニスト政治に当てたマレー、また半世紀近くに及ぶ同社の歴史を同時代のフェミニズムとの関連において捉えたライリーに依拠しながら、「第三波フェミニズム (third wave feminism)」、「第四波フェミニズム (fourth wave feminism)」とも呼ばれる、1990年代以降のフェミニズムの再興とも歩みをともにしたヴィラゴ・プレスの取り組みに一定の評価を加えることになるだろう。最後に、本研究テーマの発展の可能性にも言及し、本稿を閉じたい。

1. 大手出版傘下への編入の経緯と背景的要因

ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) の『若草物語 (*Little Women*)』(1869)を振ったフェイ・ウェルドン (Fay Weldon) の『ビッグ・ウィメン (*Big Women*)』(1997)は、1970年代から90年代のロンドンを舞台に、4人の「姉妹」(第二波フェミニズムの鍵概念の一つである「シスターフッド (sisterhood)」という意味での)による出版社の設立から大手出版社への売却にいたる経緯やその内情・背景——社内の人間関係や対

立、作家の他社への流出などの小規模出版社の限界、合併後の商業主義的傾向、フェミニズムの変化等——を描いている。「メドゥーサ (Medusa)」と称するこの出版社がヴィラゴ・プレスモデルとすることはつとに知られており、同社の創業者カ ril とオーウェンも同書の企画を認めていたとされる。実際、主要な登場人物やその関係性、社の売却の顛末はヴィラゴ・プレスのそれを彷彿とさせ、それがいつそう物語への興味をかき立てるという仕立てとなっている。¹

1976年にカルテット・ブックスから独立し、モダン・クラシックス・シリーズの成功もあって順調に事業を拡大していったヴィラゴ・プレスは、実際、その後経営に問題を抱えることになった。82年には CBC (Chatto Bodley Head and Cape Group) の全額出資子会社となり、社名を CVBC (Chatto, Virago, Bodley Head and Jonathan Cape) としたが、5年後のランダム・ハウス (Random House) による CVBC 獲得直後に自社を買い戻し、再独立を果たした。CVBCでは出版点数、販路、利益面に利点があり、財政的健全さを取り戻した一方、編集の自由を犠牲にしたともされる。ちなみに、買い戻しの資金は他社からの出資により、93年にはそのうちのガヴロン (Gavron) が筆頭株主となった。さらに1995年には巨大多国籍企業のタイム・ワーナー (Time Warner; 2000年より AOL Time Warner) 所有のリトル・ブラウン (Little, Brown; 2002年より Time Warner Books UK) に編入された。⁴ ここでも著名な作家の著作や同傘下他社の作品の出版が可能になるなどして売り上げは倍増したが、ヴィラゴ・プレスでの決定事項が役員レベルで否決される可能性が残るなど編集の自律性に制約が生じ、一部順応を免れなかったとされる。2006年にはタイム・ワーナー・ブックス・UK がフランス系巨大企業アシェット・リーブルに売却され、以後ヴィラゴ・プレスは現在にいたるまでアシェット・リーブル傘下にある。²

以上の経緯は、ヴィラゴ・プレスが財政的安定と編集、ひいては政治的な自律性との間でジレンマを抱えていたであろうことをうかがわせる。実際、現社長のグッディングスも、フェミニスト出版社が「商業、文学、政

治のバランスをとる」ことを、「ジャグリング」にも似た困難な行為としている（Goodings, “Changing …” 64）。実際、不本意ながら大手出版社と合併した例には、他にもウィメンズ・プレスやパンドラ（Pandora）がある。前者はナマラ・グループ（Namara Group）の財政的支援を受けながら、編集では自律性を維持する方策を採ったとする（Cadman, Chester and Pivot 35; Tuttle 263-64）。一方、自らを資本主義ビジネスの枠外に位置づけ、主流に組み込まれなかった出版社もないわけではなかった。オンリーウィメン・プレスやシバ（Sheba）がそれに当たるが、後者が1993年の出版を最後に翌年営業を停止したように、多くは90年代末までに資金難に陥った。こうして、1970年代に続き、80年代にも出版ビジネスを立ち上げる女性の数は増加したものの、90年代には「フェミニスト出版社現象」は終息したとされ（Riley 85）、当時イギリスで創業したうち現在も存続するのはヴィラゴ・プレスのみとなった。³

以上のような状況を招いた要因の一つに、フェミニズムの「主流化」が大手出版社との競合をもたらし、それが財政的に脆弱なフェミニスト出版社に不利に働いたことが挙げられる。冒頭に引用した、プリスコアのベンギン・ブックスへの言及にも表れているように、女性の著作に利益の上がる「市場」を見出した大手出版社は、社内にフェミニスト部門を設立したり、フェミニスト出版社を取り込むなどするようになった。言うまでもなく、資本を持つ大手出版社は著名な作家の獲得にも有利であり、作家側もそれで満足するようになったという（Simons and Fullbrook 191）。必然的に、予算の少ないフェミニスト出版社は、知名度に劣る作家で「賭け」に出ざるを得なくなった。結果として、両者の違いが薄れるばかりか、大手出版社の存在感が増しさえし、ヴィラゴ・プレスや他のフェミニスト出版社の「ブランド」はかき消されることになった。つまりヴィラゴ・プレスの「衰退」は、皮肉にもその人気によって加速したとも言える。

また、出版を取り巻く状況も大きく変化していた。1980年代の好況の後、90年代前半から半ばにかけては出版界を不景気が襲い、その頃から市場は

少数の巨大企業に独占されるようになった。95年にネット書籍協定 (Net Book Agreement) が撤廃され、出版社が書籍の価格を設定できなくなると、価格競争が激化し、出版社が利益を得るには制作コストを削減せざるを得なくなった。多額の損失を出せない小規模出版社は、やむなく大手メディア複合企業に飲み込まれていった (Riley 90)。イギリスの書籍業界も多国籍企業に支配され、フランス系のアシェット・リーブルを含む「大手四社」以外では競争が困難になっていた (Riley 124)。⁴

一方、時代の趨勢として、フェミニズムそのものが変容したことも、フェミニスト出版社の不振の要因になったと考えられる。1980年代には、女性の権利に対する反感としてのバックラッシュ現象が起こった (Faludi 11)。また多様化、断片化という言葉によって言い表されるように、当時の女性運動は一枚岩的な女性のそれから、人種、セクシュアリティ、階級等の差異を重視した「アイデンティティの政治 (identity politics)」へと移行した。さらに90年代には、「女性」というカテゴリー自体が不安定化され、かつてのような連帯の意識に根ざした運動は成立しづらくなった。また、ポストフェミニズムと呼ばれる状況にも突入した。この語自体、本来多義的であるが、「既存のフェミニスト政治に対する不満により形成されたもの」 (Pilcher and Whelehan 107)、あるいはフェミニズムが「受容されると同時に批判されるという根本的に矛盾した状態」 (Budgeon 281) などと理解される。いずれにせよ、こうした時代にあって、フェミニスト出版社は勢いを失っていった。

ウエルドンの『ビッグ・ウィメン』の一節、「メドゥーサがひとを石に変えることはない。力が失せたのだ。完全に認められてしまったがために、ひとの心をかき乱すこともなくなり、そもそも女である必要すらなくなったのだ」は、以上のような、フェミニズムやフェミニスト出版社が直面した状況を端的に言い表している。実際この作品は、一フェミニスト出版社とそれに関わる女性たちの姿にとどまらず、「1970-90年代のイギリスのフェミニズムの変化」 (Reisman 109) を描くものとも評される。

2. フェミニスト出版社の「独立性」と政治的自律性をめぐる議論

企業の吸収合併劇は「資本主義のサーガ」ともされるが (Cadman, Chester and Pivot 18)、フェミニスト出版社の場合には、とりわけ政治的主張との整合性に焦点が当てられることになった。しばしば、利潤を後回しにしても独立を保ったオンリーウィメン・プレスやシバのような出版社と比較されながら、ヴィラゴ・プレスやウィメンズ・プレスが批判の対象とされた。

ヴィラゴ・プレスに関する報道は創業当初からなされていたが、それが頂点に達したのは、1995年のリトル・ブラウンへの編入時であり、その内容は、社の主要メンバー間の争い、経営の失敗への非難、同社に代表されるフェミニズムと出版史の黄金時代が過ぎ去りつつあることへの嘆き、という三つの要素が縊り合わさったものだったとされる (Murray 29)。問題の所在を個人や人間関係に帰する最初の要素はさて置き、あとの二つについて言えば、ヴィラゴ・プレスが独立性を維持できず大手出版傘下に組み入れられたのは望ましいあり方ではなく、むしろそれによってフェミニズムや同社はその使命を終えつつあると捉えられていることが分かる。⁵しかし出版社の「独立性」という想定自体、再考の余地を残すことや、同社の大手傘下への編入を「フェミニズムの夢の売却」と解釈するのは単純に過ぎ、「ヴィラゴ特有の複雑さ」もあることが指摘されている (Murray 32, 38)。また、フェミニズムやヴィラゴ・プレスが今日に至るまで命脈を保っていることは言うまでもない。

まずフェミニスト出版社を二元化する基準ともなった独立性については、「何がフェミニスト組織かを判断する、とりわけ不適切な定式」ともされた (Murray 4-5)。フェミニスト出版社の多くは、創業以降の一時期、あるいは継続的に、非フェミニスト多国籍企業に所有され、大手銀行や自治体からの資金提供も受けるなど、もとより国際メディア、企業資金、大手の書籍販売と相互に結びついていた。したがって、フェミニスト出版社を分離主義的基準によって定義するのは適切ではないというもので

ある。

にもかかわらず、フェミニスト出版社の独立性が重視された背景には、ラディカル・フェミニズムの影響があったとされる。そもそもラディカル・フェミニズムは、資本主義体制は性差別から利益を得、またそれを永続させるものであり、「両システムは相互協力的」(Humm 30)な関係にあるとする考えから、主流企業との協力を通じた政治的スタンスの希薄化を避ける傾向があった。⁶一方、ヴィラゴ・プレスは女性解放運動の一部かつ商業出版社という「二重性」、「戦略的に多面的なアイデンティティ」(Murray 32, 38)を有していた。こうした特有の複雑さは、同社をどちらつかずの位置に置き、批判を招くことにもなったが、と同時に「成功と長寿の必須条件」(Murray 44)にもなったとされる。実際、第三波フェミニズムの文脈においては、ヴィラゴ・プレスの市場拡大という方向性は珍しいものではなくなったという(Murray 55)。同社が現在、「女性による書籍の国際的出版社」という自社の説明に「フェミニズム」の語を含めていないのを、フェミニズムとは関係がないと考える読者を疎外せずにフェミニズムの考えを表現する方法であるとしているのも、以上のような同社のあり方から理解することができるだろう。⁷

ヴィラゴ・プレスに対して向けられた批判のもう一つの要素である、フェミニズムと出版史の黄金時代の終焉という見方については、1990年代当時の社会風潮も反映されているにせよ、その後一度ならず新たなフェミニズムのうねりが押し寄せ、同社がそれと歩みをともにしながら活動を継続してきた事実を入れ、再検討することも可能だろう。

「第三波フェミニズム」の呼称が最初に用いられたのは、1992年の『ミズ (Ms.)』誌に掲載されたレベッカ・ウォーカー (Rebecca Walker) の記事においてであり、そこでなされた「私はポストフェミニズムのフェミニストではない。第三波だ」(41)という宣言が広く知られるところとなり、同時期のフェミニズム理論や実践の再興を指すことになった。第二波フェミニズムとの関係については、「その遺産を認めるとともに、限界も見出

し」しているとされ (Pilchar and Whelehan 168)、⁸ その「限界」には、白人中産階級を中心とする西欧中心的な側面、また身体の外見を装うことや性といった自己表現に罪悪感を感じさせることなどが含まれる。またポップ・カルチャーがアクティヴィズムの場になり得るといった主張にも特徴を持つ。「第四波フェミニズム」は、2000年代後半に起こり、その関心は「交差性や、主流フェミニズム内の周縁化の傾向を超えること」(Pilchar and Whelehan 168) に向けられている。またフェミニズムの活動においてインターネットやソーシャル・メディアを通じたオンラインを活用する点が特徴的であり、2017年の「ミー・トゥー運動 (#MeToo movement)」が、世界的な広がりを見せたことは記憶にも新しい。⁹

ヴィラゴ・プレスにおいてモダン・クラシックス・シリーズは、現在も重要な出版物であり、全出版物の三分の一以上を占めるとされるが、近年の出版物や活動には、同社が上述のようなフェミニズムの再興とも協調してきたことがうかがえる (Riley 151-52, 155-56)。2000年代以降、ヴィラゴ・プレスが出版する黒人やエスニック・マイノリティによる書籍は倍増し、女性の生のグローバルな様相を示す出版物も全体の6パーセントを占めるようになってきている。また伝記や回想録を通じてフェミニズムのメッセージを伝えるプロジェクトも継続しており、伝記・自伝の出版物の割合も2000年代以降順調に伸び、出版物全体の2割近くを占めるまでになっているが、これはかつての集団主義から個人化への変化に対応するものとされる。出版と並行し、インターネットを通じた活動を積極的に押し進めているのも、近年のフェミニズムのあり方に即したものと言えるだろう。2000年には社のウェブサイトを開設し、ニュースレターの発行を開始、さらにオンライン・ブッククラブを含むウェブ・ベースの活動も行っている。

以上の他に、ヴィラゴ・プレスがもたらした持続的変化として、女性の出版業界への参入とそれによる業界全体への波及がある。ヴィラゴ・プレスや他のフェミニスト出版社の創業は、女性を書籍業から排除するシステ

ム自体への異議申し立てであったとも言えるが、それが女性の出版業への参入を促し、男性偏重の傾向のあった業界そのものに変革をもたらすことにつながった。2000年代にはイギリスの主要出版社3社中2社で女性経営者がトップを務め、それが2013年までには主要4社中1社となったものの(Riley 134)、女性がリーダーの一定割合を占める、数少ないビジネス領域の一つとなった。出版業は、「もはや『ズボンをはいた紳士たち』に支配されていない」のである(Riley 160)。

以上のような活動・成果は、ライリーの著作『ヴィラゴ・ストーリー』がその最終部において紹介するものである。ヴィラゴ・プレスを、「1970年代以降のフェミニズムの進展や、女性の著述や広範な文化における変化を検証するための有用なプリズム」(1)として、半世紀近くに及ぶ同社の歴史や出版活動を射程に収めた同書は、近年の取り組みを第三波、第四波フェミニズムを「反射」するものとして捉えていることになる。そしてそれは、1990年代にヴィラゴ・プレスに向けられた批判、とりわけフェミニズムや出版史が終わりつつあるとする見方への間接的な反論となり得ているようにも思われる。またこの期間は、2004年に出版されたマレーの著作が十分にカバーしていない部分でもあり、ライリーの著作の意義をそこに見出すこともできるだろう。

1990年代で幕を閉じるウェルドンの『ビッグ・ウィメン』にも、現在の時点から評価する見方がある。同作はこれまで、「1960年代後半以降のフェミニズムの遺産の変質に対するウェルドンのシニシズム」(Whelehan 345)、「ウェルドンのフェミニスト政治に対する大まかな風刺や、女性の集団的努力への不思議なほど敵対的な描写が読み取れる」(Murray 3)などと評されてきた。しかしマラー・E・リースマン(Mara E. Riesman)は、登場人物たちがフェミニズムの理念がありふれたものになってしまったことを憂い、フェミニズムが必要であり続けるかを議論するなかで、そのうちの一人が、70年代女性解放運動における多くの問題は90年代においても密接に関わっており、よって焦点化される必要があると主張する場面に言

及しながら、同書は読者にこうした問題を考えるように促し、フェミニズムが依然として必要だとする姿勢を示しているという意味づけている (113)。

*

「フェミニスト出版社現象」から半世紀近くを経た近年、出版社の創業者たちの回想録が相次いで出されている。フェミニスト・プレス創業の思い出が著作全体の「主軸」(Braun 18)を成していると評価されたハウの『活動し続ける人生——回想録 (*Life in a Motion: A Memoir*)』(2011)、ヴィラゴ・プレスの創業者オーウェンの『片道切符——回想録 (*Single Journey Only: A Memoir*)』(2019)、現社長グッディングスの『リングをひと齧り——書籍、作家、ヴィラゴとの人生 (*A Bite of the Apple: A Life with Books, Writers and Virago*)』(2020)であり、これらを取り上げる書評も多く書かれたことで、第二波フェミニズム期における女性たちの出版活動が新たに耳目を集めることになった。フェミニスト出版社に関するこれまでの研究は、まだ追究されるべき余地を残すことが指摘されてきたが、これらの著作は今後の研究の深まりに寄与することになるだろう。

フェミニスト出版社の分析においては、それを地理的な枠組みに置き、国の特徴を正確に反映することが必要とされる通り (Murray 5)、本稿ではヴィラゴ・プレスに焦点を当て、それをイギリスのフェミニズムや出版をめぐる社会文化的文脈において考察したが、フェミニスト出版社現象は国際的な動向であり、またその後も新たな出版社が興っていることから、¹⁰ この研究を時間的、空間的に広がりを持つものとして発展させていくこともできるだろう。さらに、出版に加え、書籍の取引、販売、印刷等も含めた「フェミニスト・プリント・カルチャー」の枠組で捉えるなら、例えば、その「不可欠な部分」でありながら「看過されてきた」(Braun 20) フェミニスト書店も、研究の対象となる。出版社や出版物が「フェミニズム運動に声を与えた」のに対し、書店はそのための「物理的空間を与えた」(Braun 19) 点で意義を持つ。古くから知られているところでは、ロ

ンドンのシルバー・ムーン (Silver Moon) やシスターライト (Sisterwrite) などがあり、ヴィラゴ・プレスも1984年にコヴェント・ガーデンに出店した。いずれもその後営業を停止したが、¹⁵ シスターライトは2018年に営業を再開している。またアメリカでも、1970年に最初のフェミニスト書店の創業以来、80年には70店余り、その後100店余りと店舗数を伸ばした。現在までにはそれが数えるほどに減り、出版社同様の「盛衰」を示しつつ、いまなお営業を続けている書店もある (Braun 18-20)。今日の出版、他のプロジェクトは、第二波フェミニズム期の土台の上に築かれているが、フェミニスト・プリント・カルチャーが別のかたちで生き延びることに疑いは入れないとされる (Braun 20)。本稿で紹介したヴィラゴ・プレスの近年の取り組みも、フェミニスト出版文化が「生き延びる」ことを支える一部を成すものと期待したい。

注

- 1 オーウェンは同作を称賛しつつも、それがあくまでもフィクションであるとことわっている (Reisman 117)。また同書はテレビドラマ化され、翌1998年にチャンネル4 (Channel 4) で放映されたが、カレルとオーウェンはこれにも助言を提供したとされる (Reisman 110)。尚、後に出版された同書のアメリカ版は、*Big Girls Don't Cry* と改題された。
- 2 以上の経緯は、創業20周年記念として出版された *A Virago Keepsake to Celebrate Twenty Years of Publishing* の他、Murray, Riley に詳しい。
- 3 ここで思い起こされるのは、アメリカのフェミニスト・プレス社だが、同社は「学術コミュニティとの相互関係の度合い」においてヴィラゴ・プレスと異なっていた (Murray 49)。当初、絶版となった女性作家の古典を出版していたフェミニスト・プレスは、1980年代に入ると、アメリカ文学のアンソロジーを編み、同領域におけるジェンダーの偏りを認識していた教員に提供したり、文学学術団体との関係を深めるなどして販売するようになった。同社を創業したハウ自身、文学研究者であ

り、バルティモアで創業した後、1986年にニューヨーク市立大学と提携し、以後同大学内に置かれている。70-80年代に興されたヴィラゴ・プレスや他のイギリスのフェミニスト出版社も、同時期に、文学カノンへの問いにより、大学のカリキュラムに多くの女性作家の作品が組み込まれるようになったことで、学术界と互恵的な関係にあったと考えられるが、イギリスにおける女性学のネットワークの欠如などいくつかの要因が関係強化を阻んだとされる (Murray 49-50)。

4 例えばパンドラは1980年代後半以降、その所有が目まぐるしく変わり、90年の時点でハーパー・コリンズ (Harper Collins) のもとにあった。結局、翌年の自社の買い戻しの試みもかなわず、98年には売却されることになった。またウィメンズ・プレスは、2003年に営業を停止している。

5 1995年のヴィラゴ・プレスの大手出版グループへの編入が、メディア等に「フェミニズムが死を迎えたことの証拠」と解されたことは、ライリーにも紹介されている (Riley 87)。

6 両者の関係は、以下のように説明される。すなわち、資本主義においては、商品および商品化された土地や労働力が資本の生産活動に組み入れられるが、労働力の商品化にあっては、「不可避免的に、労働者・・・の生命、生活の再生産を外部に生成・成立させ」、「ここに家父長制・・・との接合関係が必然化する。[しかし] 資本主義は・・・本源的蓄積の継続的過程であって、この困難を、資本主義的法則において処理することは不可能である」(井上、他 176-77)。こうした考えは社会主義フェミニズム、マルクス主義フェミニズムにも共通していた。一方、リベラル・フェミニズムは資本主義に対して敵対的な姿勢をとることはなく、むしろ男女間の平等はその体制内で達成可能であるとした。しかし、その限界についての以下の指摘は、フェミニスト出版社のあり方にも多くの問題を提起するものであっただろう。「実際のところ、フェミニストの事業は、書店にせよ出版社にせよ・・・、高い政治的理

想があったとしても経営の成功の助けにならないということが分かった。フェミニストが好む集团的経営のプロセスは、資本主義的基準からすると手間がかかって非効率的であり、顧客の少ないオルタナティブな事業は経費がかさむ。フェミニストの事業は生き残ることもあるかもしれないが、オルタナティブなやり方を提示したとしても周縁的なものになりがちであって、既存の家父長的な資本主義経済への本当の意味での挑戦となることはない」(Tuttle 55)。

7 ライリーは、これにより同社のフェミニズムの主義が希薄化することはないとしている(Riley 122-23)。ライリーの著作にはほぼ一貫して示されるヴィラゴ・プレスに寄り添った見方は、創業者カ ril、共同創業者ロウ、現社長グッディングスら、社の主要メンバーへのインタビューに多くを負うその手法による部分もあると思われる。しかし、後述する通り、同書の意義はむしろそれとは別の点にあると考えられる。

8 イギリスのウェブサイト『Fワード——現代イギリスのフェミニズム (*The F-Word: Contemporary UK Feminism*)』を開設し、『Fワードを再主張する——今日のフェミニズム (*Reclaiming the F Word: Today's Feminism*)』を著した一人キャサリン・レッドファーン (Catherine Redfern) の言葉も、上述の第二波フェミニズムとの接続性を裏付けるものである。「第二波フェミニズムが完全ではなかったことを認識しつつも、若いフェミニストたちは、その経験において、年長のフェミニストたちに負っているものに、ただちに感謝したいのだ。・・・『Fワード』を捨ててしまった人々から取り戻そうとしているフェミニストが大勢いることを示したいのだ」(Redfern and Aune xi)。

9 インターネットを通じた活動のうち、イギリスで開設されたウェブサイトとしては、上述の『Fワード』に加え、『エヴリデイ・セクシズム・プロジェクト (*The Everyday Sexism Project*)』、『UKフェミニスタ——男女平等を求める活動 (*UK Feminista: Action for Equality Between Women and Men*)』などがある。2012年にローラ・ベイツ (Laura Bates)

が開設した『エヴリデイ・セクシズム・プロジェクト』には、セクシャル・ハラスメントや職場での差別など、女性たちが日常のなかで遭う被害についての声が寄せられている。また2014年には、それが同タイトルで書籍化もされている。

尚、第三波・四波フェミニズムという呼称における「波」のアナロジーについては、無批判に使用されるべきではない、いくつかの理由も示されており（Pilchar and Whelehan 169）、その中には、各「波」が典型的に関連づけられる関心や活動が本来の多様性を覆い隠してしまうことや、「波間」にあたる時期に生じた活動や業績の認識を疎かにしてしまうことが含まれる。また「三」、「四」という進歩的な含意が、フェミニズムは直線的ではない発展をしてきたという理解を妨げることへの懸念も示されている（Riley 2）。実際、これらの「波」は、必ずしも別個のものではなく、そこに通底する課題も存在するからである。

10 巨大複合企業に占有されるイギリスの出版業界にあって、近年、小規模のフェミニスト出版社が興され、独自の専門領域を確立しているのは「ポジティブなステップ」（Riley 135）とされている。

11 ヴィラゴ・プレスの試みは短期間に終わったが、シルバー・ムーンは1984–2001年、シスターライトは1978–93年のそれぞれ十数年間営業を続けた。

Works Cited

- Bates, Laura. *Everyday Sexism*. Simon & Schuster Ltd, 2014.
- Baumgardner, Jennifer. “Found Her: An Interview with Florence Howe.” *Women's Review of Books*. Vol. 37, No. 1, 2020, pp. 4–6.
- Birch, Dinah. “‘Apple of Their Eye’: The Role of Outsiders in Virago's Pioneering Success.” *Times Literary Supplement*. 7 Aug. 2020, pp. 12–13.
- Braun, Jolie. “Building the Feminist Shelf.” *Women's Review of Books*. Vol.

35, No. 6, 2018, pp. 18–20.

Budgeon, Shelly. “The Contradictions of Successful Femininity: Third-Wave Feminism, Postfeminism and ‘New’ Femininities.” *New Femininities: Postfeminism, Neoliberalism and Subjectivity*, edited by Rosalind Gill and Christina Sharff, Palgrave Macmillan, 2011, pp. 279–92.

Cadman, Eileen, Gail Chester, and Agnes Pivot. *Rolling Our Own: Women as Printers, Publishers, and Distributors*. Minority Press Group, 1981.

Cooke, Rachel. “Taking Women off the Shelf.” *The Guardian*. Apr. 6, 2008, <https://www.theguardian.com/books/2008/apr/06/fiction.features1>.

The Everyday Sexism Project. Nov. 5, 2021. <https://everydaysexism.com>.

Faludi, Susan. *Backlash: The Undeclared War Against American Women*. The 15th Anniversary ed. Three Rivers Press, 2006.

Goodings, Lennie. *A Bite of the Apple: A Life with Books, Writers and Virago*. Oxford UP, 2020.

---. “Changing the Office and Changing the World.” *Publishing Now: A Definitive Assessment by Key People in the Book Trade*, edited by Peter Owen, Peter Owen, 1993, pp. 64–70.

Howe, Florence. *A Life in Motion: A Memoir*. Feminist Press, 2011.

Humm, Maggie. *The Dictionary of Feminist Theory*. 2nd ed. Simon and Schuster, 1995.

Murray, Simone. *Mixed Media: Feminist Presses and Publishing Politics*. Pluto Press, 2004.

Pilchar, Jane, and Imelda Whelehan. *Key Concepts in Gender Studies*. 2nd ed. Sage, 2017.

The F-Word: Contemporary UK Feminism. Nov. 5, 2021. <https://thefword.org.uk>.

Redfern, Catherine, and Kristin Aune. *Reclaiming the F Word: Feminism Today*. New ed. Zed Books, 2013.

Reisman, Mara E. *Fay Weldon, Feminism, and British Culture: Challenging*

- Cultural and Literary Convention*. Lexington Books, 2018.
- Riley, Catherine. *The Virago Story: Assessing the Impact of a Feminist Publishing Phenomenon*. Berghahn, 2018.
- Simons, Judy, and Kate Fullbrook, eds. *Writing: A Woman's Business: Women, Writing, and the Marketplace*. Manchester UP, 1998.
- Tuttle, Lisa. *Encyclopedia of Feminism*. 1986. Arrow Books, 1987.
- UK Feminista: Action for Equality for Women Between Men*. Nov. 5, 2021.
<https://ukfeminista.org.uk>.
- A Virago Keepsake to Celebrate Twenty Years of Publishing*. Virago Press, 1993.
- Walker, Rebecca. "Becoming the Third Wave," *Ms.* Jan. 1992, pp. 39–41.
- Weldon, Fay. *Big Women*. 1997. Flamingo, 2012.
- Whelehan, Imelda. *Feminist Bestseller: From Sex and the Single Girl to Sex and the City*. Palgrave Macmillan, 2005.
- 井上輝子、他編『岩波女性学辞典』、岩波書店、2002年。